

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 22 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520477

研究課題名（和文） 日本古写本「単経音義」における俗字研究

 研究課題名（英文） A Study of the Non-Standard Characters Found in the *Sounds and Meanings for the Characters in the Individual Buddhist Scriptures* as Reflected in Some Old Manuscripts Extant in Japan

研究代表者

梁 晓虹 (LIANG XIAOHONG)

南山大学総合政策学部・教授

研究者番号：00340274

研究成果の概要（和文）：

本研究は、奈良、平安時代に日本の仏僧が撰述した単経音義書に用いられている俗字を対象としたものである。奈良時代のものとしては、『新訳華嚴経音義私記俗字研究』を一書完成させ、北京の出版社から本年6月に出版される。また、則天文字についても研究し、その成果を学会にて発表し、また或いは学術誌に投稿し、採用されるに至った。平安時代のものとしては、『法華経积文』を中心として漢字学及び訓故学の角度から探求した。その成果は、上記と同様、学術会議で発表、あるいは学術誌に公刊した。

研究成果の概要（英文）：

The research undertaken under the title given above deals with the non-standard characters used in the individual Buddhist scriptures as compiled by Japanese monks in the Nara and Heian periods. As for those from the Nara period, I have completed a monograph entitled *A Study of the Private Notes to the Sounds and the Meanings in the New Interpretation of the Kegonkyō 華嚴経*. This will be published in June, 2013 by a press in Beijing. I have also conducted a series of studies dealing with the Sokuten 則天 characters and presented their results in scholarly conferences and published in academic journals. As for those from the Heian period, I have researched on the characters and philological issues surrounding the *Hokekyōshakumon 法華経积文*, a few results of which were presented in international conferences and published in academic journals.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000円	330,000円	1,430,000円
2011年度	500,000円	150,000円	650,000円
2012年度	500,000円	150,000円	650,000円
総計	2,100,000円	630,000円	2,730,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：音義、俗字

1. 研究開始当初の背景

(1) 代表者は、長年にわたって漢語仏典を資料にして中国語史研究を進めてきたので、

漢文仏典資料には、精通していると自負している。

(2) 代表者と上海師範大学の徐時儀・陳五

雲の両教授とは仏教音義に関して共同研究を過去十数年ほどしてきており、『仏教音義与漢語詞彙研究』（梁曉虹・徐時儀・陳五雲共著；中国商務印書館，2005年）、『新訳華嚴經音義私記』俗字研究（上、中、下）（梁曉虹・陳五雲共著；韓国忠州大学校『東亜文献研究』第4号、第5号、第6号，2009年6月、2009年12月、2010年10月）等の論著を出版した。また、仏教音義に関する国際学術会議を中国の上海師範大学にて二度開催したりする実績もあった（2005年9月；2010年9月）。

(3) 上記の共同研究の内容は、申請者が日本の仏教音義の部分を担当し、本研究開始以前にも初歩的調査を既に試みており、それをベースに『四分律音義』、『孔雀経単字』や石山寺『大般若経音義』（中巻）等の単経音義に見られる俗字について研究を進めてきた。これらが本研究を進行させるのに基礎となったことは疑いない。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、現存する奈良、平安初期の日本人僧侶の手になる「単経音義」を基礎資料として、それらに用いられた俗字を総合的に研究することを主旨とした。「単経音義」とは、ある特定の經典に用いられた漢字の音義を指し、そこには多くの俗字がみられる。これらの俗字については、従来、国語史、仏教学等の領域で研究がなされてきたが、その漢字、俗字研究に大きく貢献しうる資料としてその価値は国際的によく知られていないのが現状である。

(2) 本研究では、日本における研究をふまえながら、「単経音義」に関する俗字研究を進め、敦煌文書について蓄積されてきた中国及び日本に於ける俗字研究の成果との比較、分析を通じて、漢字の伝播と受容・変容という文化史的な側面を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 既刊資料の閲読：古辞古典研究会の『古辞書音義集成』二十卷（汲古書院）中の写本音義の部分、及び国際仏教大学院大学学術フロンティア実行委員会による（日本古写経善本叢刊第一輯）『玄奘撰一切経音義金剛寺一切経本七寺一切経本東京大学史料編輯所蔵本西方寺一切経本京都大学文学部蔵本』等を精読した。これは、日本に現存する古写本仏経音義における俗字使用状況の全体的な把握をするための基礎作業であった。

(2) 資料調査：既に収集してあった資料の全面的調査を開始し、その外、各図書館や研究所を利用して調査したり、石山寺、高野山（高野山大学）等の仏典古写本を蔵する古刹に訪問したりし、実地の古写本調査をおこなった。また、韓国の海印寺、ソウルにある高麗大蔵経研究所に赴き、現存する最全、最古の仏経刻本資料を調査した。

(3) 学術交流：研究費助成金を受けている間、それぞれ前後してスイスのチューリッヒ大学（Wolfgang Behr 教授を始め他の研究者）、韓国忠州大学東亜文献研究所（現名交通大学、朴英祿教授、その他）、海印寺僧伽大学（宗黙元学長）、高麗大蔵経研究所（李奎甲教授）、中国上海師範大学（徐時儀・陳五雲両教授）、南京大学（張伯偉教授）、台湾の成功大学（王三慶・潘宝春両教授）、南華大学（鄭阿財教授）、嘉義大学（朱鳳玉教授）、政治大学（竺家寧教授）等の各機関に訪問し、中国語史研究、漢字研究、敦煌学研究、仏経文献研究、古籍整理研究等の分野の専門家と学術交流したりした。これは、本研究にとって少なからずのインパクトがあったと思われる。

(4) データベースの構築：入手した重要な資料をスキャンし、漢字ごとの形音義に関する画像付きデータベースの構築をした。特に、『新華嚴経音義私記』に関しては、代表者ともう一人の共同研究者（中国南京曉莊学院苗昱）とて『新華嚴経音義私記整理研究』（仮題であるが、ほぼ三分の二を完成）を目下進めているため、データベース構築は、検索に威力を発揮すると思われる。重要な仏経音義古写本をスキャンし、更に各写本中の主な俗字をも抽出したため、写本中の漢字の原貌が即座に分かり、漢字比較の際、非常に便利である。

(5) 俗字の“個案”（一つ一つの字に対する考案）に対する詳細な記述は、本研究にとって重要な作業の一環である。従って、それらの代表的な俗字について個案を検討することは不可欠な仕事であった。具体的には、俗字の画像処理とデータベース化を進めながら、日中韓三国の学者による漢字研究の成果を吸収し、漢字学（ごく簡略に言えば、形・音・義の三面から漢字を考察し、文字体系として、いかに文脈中で機能を果たすか）の観点から個案について分析し、同異を明らかにし、特徴を帰納することであった。このようにして、多くの個案を通して漢字が日本にもたらされ、発展していった過程が考察可能なため、それは日本の漢字学研究に不可欠な価値があると言えよう。

(6) 学術会議参加：2010年10月より合計六回にわたって国際学術会議に参加した。これらの会議に参加し、別の研究者や学者とある問題について、意見を聞いたり討論できることは、自己の学術視野を広める点で有益なことは言うまでもないが、論文や著書を推敲する際、別の研究者や学者との交流は事実上不可欠なことから、学術交流のためにある程度の費用を割いたことを敢えて付け加える。

4. 研究成果

日本の学界では、古写本仏典の音義研究は、主に国語史、辞書史、そして古籍訓点等に集中し、漢字や俗字方面の研究は、あまり多くないのが代表者の認識であった。本研究は、古写本仏経音義中の俗字使用に関し全面的な研究を展開させ、さらに進んで敦煌資料の俗字や六朝の碑紋、碑別の研究にも研究分野を広げ、日本に於ける漢字発展の軌跡や、漢字が漢字文化圏を構成していった糸口をたどった。このような研究は、開拓性を含み、意義深しと信じた所以である。具体的にその成果を以下述べるが、それらはここに概括したような背景と照合し、考慮されたい。

(1) 俗字研究

『新華嚴経音義私記俗字研究』（共著：梁曉虹・陳五雲・苗昱）と題する書は、本年6月に北京の新世界出版社から出版されるが、これは奈良時代の写本『新華嚴経音義私記』に用いられている俗字を広角度から考察した研究書である。この音義書に見られる俗字について研究を進めたが、中国の中古時代に用いられた俗字や則天文字とも比較分析したものである。また、漢字が日本にて俗字として用いられていった過程を遡源的に分析した。即ち、漢字が日本に流伝し、あるいは独自に、あるいは中国での進展に影響をされつつ、発展して行ったかについて検討したものである。このことは、奈良時代の古写本を通して、漢字が日本に流伝し、発展して行ったかを追求するということであり、古写本仏経音義に関しては、最も全面的な研究であったと言える。本書は合計九章から構成され、筆者は、そのうち七章を受け持った。

(2) 則天文字研究

① 「奈良時代日僧所撰『華嚴音義』与則天文字研究」（中国社会科学語言研究所編輯部編『歴史語言研究』第4巻、2011年11月）

② 「從兩種海外古写本『華嚴経』資料考察則天文字在海外的流傳」（学会発表論文、2012年10月、韓国海印山僧伽大学、第六回佛経語言学国際学術研討会）

上記①は、奈良時代の『新華嚴経音義私記』及び『新華嚴経音義』中の則天文字に関して総合的に研究した鎬矢であろう。上記②も、東アジア（即ち、日本、韓国、中国）所見の古写本八十巻『華嚴経』に用いられている則天文字についての総合的な比較研究であった。伝播していった経路から見て、字形の構造、文化的背景等の方面から、則天文字がどのように展開していったか、また字形の同異に関しての分析を試みた。漢字が海外へと伝播し、発展して行ったかの側面をも考察の対象にした。両者とも斯学において先行的論文と思われる。

則天文字は、近年来俗字の研究分野にて、脚光を浴びている一つのホットポイントであるが、中国大陸及び台湾の学者は、資料的に十分な注意を払っているとはいえない。上記①と②は、中国語での貢献であり、さらに中国、日本、韓国所見の八十巻『華嚴経』中の則天文字に対して比較研究をしたため、聊か不足面を補うことができたのではあるまいか。そして、①と②は、則天文字が中国内にとどまらず、海外へと発展して行ったプロセスを解明せんとする主旨のため、その重要性が認められよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

- ① 梁曉虹、陳五雲、「新羅僧順憬殘存音義考—以『法華経积文』為中心」、香港中文大学主催のシンポジウム論文編輯委員会、査読有、掲載確定、2013年
- ② 梁曉虹、「四部日本古写本佛経音義述評」、『域外漢籍研究集刊』（南京大学域外漢籍研究所）、第7巻、中国中華書局、査読有、掲載確定、2013年
- ③ 梁曉虹、「從兩種海外古写本『華嚴経』資料考察則天文字在海外之流傳」、第11号、韓国交通大学・上海師範大学『東亞文献研究』第11巻、査読有、掲載確定、2013年
- ④ 梁曉虹、陳五雲、「『法華経积文』與漢字訓詁研究—以仲算“今案”為中心」、南山大学『アカデミア』文学・語学93号、査読無、2013年1月、pp. 53-76.
- ⑤ 梁曉虹、「石山寺本『大般若経音義』（中巻）與慧琳本之詞彙比較研究」、浙江大学

漢語史研究中心·上海教育出版社、『漢語史學報』12卷，查誦有、2012年12月、pp. 42-54.

- ⑥ 梁曉虹、「『法華經音訓』與異体字研究」(程邦雄·尉遲治平主編『圓融內外 綜貫梵唐—第五回漢文佛典語言國際學術研討會論文集』)、台灣花木蘭出版社、查誦有、2012年11月、pp. 199-220.
- ⑦ 梁曉虹、「奈良時代日僧所撰“華嚴音義”與則天文字研究」、中国社会科学院語言研究所『歷史語言學研究』第4卷、查誦有、2011年11月、pp. 286-301.
- ⑧ 梁曉虹、「日本所存八十卷『華嚴經』音義綜述—以『新訳華嚴經音義私記』為中心」、『第二回仏經音義研究國際學術研討會論文集』、鳳凰出版社、查誦無、2011年9月、pp. 195-220.

[学会発表] (計6件)

- ① 梁曉虹、「日本“篇立音義”與漢字研究—以『淨土三部經音義』為中心」、「經典與訓詁—第十一回中国訓詁學國際學術研討會」、2013年5月18日、台灣台南嘉南藥理科技大學
- ② 梁曉虹、陳五雲、「『法華經積文』與漢字訓詁研究—以仲算“今案”為中心」、MOVING FORWARD-International Symposium on Chinese Linguistics and Philology in Celebration of the 50th Anniversary of the Department of Chinese Language and Literature, 2012年12月18日、The Chinese University of Hong Kong(香港中文大學)
- ③ 梁曉虹、「從兩種海外古寫本『華嚴經』資料考察則天文字在海外之流傳」、第六回佛經語言學國際學術研討會、2012年10月16日、韓國海印寺僧伽大學
- ④ 梁曉虹、「『新訳華嚴經音義私記』與唐代俗字研究」、IACL—19 (the 19th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics, 2011年6月11日、中国南開大學
- ⑤ 梁曉虹、「石山寺本『大般若經音義』與慧琳本之詞彙比較研究」(代讀)、第二回漢語歷史詞彙與語義演變學術研討會、2011年6月18日、中国浙江大學

- ⑥ 梁曉虹、「日本則天文字研究資料—以『新譯華嚴經私記』為例」、Intensive Workshop “Reading China’s Most Ancient Texts: An Introduction to Oracle-bone Inscriptions”, The East Asia Seminar at the University of Zürich. 2011年3月24日、University of Zürich.

[図書] (計2件)

- ① 梁曉虹·陳五雲·苗昱、『新華嚴經音義私記俗字研究』、中国新世界出版社、2013年6月 pp481.
<http://book.douban.com/subject/24529805/>
- ② 除時儀、陳五雲、梁曉虹、『第二回仏經音義研究國際學術研討會論文集』、中国鳳凰出版社、2011年9月、pp578.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梁 曉虹 (LIANG XIAOHONG)
南山大學·綜合政策學部·教授
研究者番号：00340274

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし